魔法少女リリカルなのはA's　～光と闇の指輪～

桐生結奈

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法少女リリカルなのはＡ’ｓ　～光と闇の指輪～

【Ｎコード】
Ｎ８９８７Ｍ

【作者名】
桐生結奈

【あらすじ】
プレシア・テスタロッサ事件から半年過ぎた後にフェイトは再びなのはの世界へ戻って来ます。
なのはと同じ学校へ行く事になったフェイトは喜びを隠せません。その姿を見たアルフは安堵します。フェイトを見送った後クロノから衝撃の言葉を聞かされてしまいます。

その言葉とは――――

闇の書事件とは違ったストーリーが今動き出します。

魔法少女リリカルなのはA' s　始まります。

「プロローグ」（前書き）

この作品はなのはとギアスのコラボ作品です。なのはの世界にギアスキャラがいる形になります。ギアスキャラはジノ・ヴァインベルグしかいません。作者の趣味によるものですので悪しからず。ルルーシュやスザクは一切出てきませんのでご了承下さい。

コラボ小説はこれが初めてですので、おかしな部分があると思いますが、笑って許してくれたら幸いです。

「プロローグ」

プレシア・テスタロッサ事件――通称ＰＴ事件…。それは捜索指定遺失物＜ロスト・ロギア＞「ジュエルシード」をめぐって高町なのはとフェイト・テスタロッサが初めて出会い、死力を尽くして戦い、そして「友達」になるまでの出来事のことである。

その事件から半年が経ち、フェイト・テスタロッサは再びなのはのいる世界へと戻るのである。

「かけがえのない友達」の元へと――――

「よし…と」

鏡の前で制服のリボンを整える金髪の女の子・フェイト。ツインテールがチャームポイントである。フェイトはくるりと体を回して後ろに居る使い魔・アルフに向かって照れながら言った。

「どう…かな…？アルフ…」

主のあまりの行動の可愛さに目を輝かせながら、アルフは指を組んで叫ぶように言った。

「フェイトォッ　似合っているよぉ♪」

照れ顔は変わらずにニコッと微笑みながらフェイトは感謝の言葉を述べた。

「ありがとう…アルフ…。　とても…嬉しいよ…」

＞ｉ１２２０６―１６９５＜

（なのはと同じ制服なんだ…）

どきどきとフェイトは内心そう思っていた。

高町なのは。かつてジュエルシードをめぐって争った魔導師。そして初めての友達。なのはは真っ直ぐに自分の苦しみを受け止めて

くれた。全力でぶつかってくれた。なのはに出会わなければ今の自分はいないだろう。
　それは使い魔であるアルフも同じ気持ちだった。母であるプレシアに愛情の一つも貰えず、ただの人形として扱われた過去。どんなに傷ついてもフェイトは文句一つ言わず母の言葉に従った。その姿には親子の絆など微塵も感じられなかった。
　笑顔も無くただ大事な母の欲望のためだけに戦い、時空管理局の魔導師に完膚無きまでに叩きのめされたこともあり、傷つく主の姿はもう見たくなかった。
　今が一番幸せなのだからこの幸せが長く続いて欲しいと願うアルフであった。

「それじゃ　アルフ　行って来るねっ！」
　満面の笑みを浮かべて踵を返し駆け出すフェイト。
「行ってらっしゃぁい♪」
　それに答えるアルフ。愛らしい主の姿だった。
　ドアがパタリと閉まるまでアルフは手を振り続けた。
「フェイトは行ったんだな？」
　背後から男の子の声がした。振り向くとそこには紺色の髪にグレーの瞳を持つ１０代前半の男の子が腕組みしながら笑顔で立っていた。
「クロノッ！」
　アルフは姿を見るなり、その姿の主の名前を呼んだ。クロノと呼ばれた男の子は笑顔のままで口を開いた。
「今日から学校だったよな。なのはの学校」
「少し心配なんだけどねぇ…」と言いながらアルフは溜息をつく。
「フェイトなら大丈夫だろ？なのはもいるんだしさ」
　アルフの心配もよそにクロノは軽い口調で言う。
「それはそうだけどさ…」
「何の心配があるんだ？アルフ」

アルフはまた溜息をつきながらつぶやいた。
「初めてづくしだしさ…　ちゃんとなじめるか…　心配なんだよ…」
フェイトの性格を熟知しているからこその言葉である。
「保護者みたいだな…。でも大丈夫だよ。彼もいるみたいだから」
クロノは親指を上に突き出しながらウィンクした。
「彼って…　まさか…」
アルフの表情が一瞬にして青ざめる。クロノはにぱっとしながら人差し指を立てて言った。
「そうそう、ご推察の通りさ。天才魔導師少年だよ」
「先が思い遣られるよ…」とアルフは涙を流しながら祈りを込め、どーか遭いませんよ一に　とつぶやいた。
「！？」
その姿にクロノは困惑していたのだった。

第1話に続く。

「プロローグ」（後書き）

いかがでしたでしょうか？感想あればお待ちしております。

追記：挿絵追加しました。『する』表示で表示されると思います。

第1話　「運命の再会」（前書き）

前回より少し間が空いてしまいまして申し訳ありません。

未熟者ですが、楽しんで頂ければ幸いです。

なのはの学校へと向かうフェイト。その行く先で一体何が…。

リリカルマジカル、なのは出てませんけど頑張ります。

第1話　「運命の再会」

私立聖祥大付属小学校――　なのはの通っている学校である。ここにフェイトも編入という形で入ることになった。
なのはと同じクラスへと。

その学校へどきどきしながら向かうフェイト。なのはやビデオレターで知り合ったアリサやすずかとも会えるのだと思うと気持ちはますます上がっていった。

「フェイト・テスタロッサ…」

背後から声が聞こえた。囁かれた感じの声だったが確かに自分の名前を呼ばれた。

（この声…）
どこかで聞いたことのある声。フェイトは振り返るとその声の主に驚いた。
フェイトが振り返った先にいたのは、自分と同じくらいの男の子。金髪で空色の瞳を持ち、綺麗な顔立ちだった。横髪ははね、襟足部分から髪をひとつにまとめている。更に、聖祥小学校の男子制服を身につけている。
その男の子は普通にその場に立っていたが、フェイトにはとても神々しく映った。そう…彼こそアルフが願っていた“フェイトに会って欲しくない人物”だったのだ。運命のいたずらか、フェイトは朝一番にその人物に出遭ってしまった。
さっきまでのどきどきの気持ちは消えうせ、警戒心に満ち溢れた。だが、驚きは隠せず目を見開いてフェイトはその男の子に問いかけた。

「あなたもこの学校だったの！？」

「そうだよ。キミこそここに来るなんてさ？」

にっと笑いながら男の子は答える。そして質問をした。

「わっ私は…友達がいるから…」

しどろもどろしながらフェイトは顔を赤く染め、答えを返した。

「へー　改心したんだ？」

男の子は目を閉じながらフェイトの答えを聞いていた。フェイトは右手にコブシをつくり、それを口元に当て、まゆげを八の字にしながら照れたままの顔で申し訳なさそうに言う。

「あ…えっと…　そう…　なんだ…。キミの言ったとおりだった…。友達は大事だってこと」

フェイトは男の子と初めて会った時のことを思い出していた。母・プレシアから頼まれたロスト・ロギアを探し、見つけたまでは良かったがその後目の前にいる彼と遭遇し、一戦交えたのである。

「友達が教えてくれたんだ…」

微笑みながらフェイトは話した。その様子を見た金髪の少年は目を再び閉じ、何かに思いをふけながら口を開いた。

「そう…それは安心したよ。良い友達にめぐり会えたんだな」

彼にとってフェイトとの出会いは最悪の形だった。ロスト・ロギア回収は彼の仕事であるが、その依頼用件はハンパなく、いくら時間があっても足りないくらいだった。用件のほとんどを回しているのはクロノで局に入ってから友達になった。…名目上は。

『とてもてこずっている魔導師がいる――――』と局の魔導師ですら手を焼いている相手。それがフェイトだった。

初めてフェイトを見た時少年はとても儚く見えた。強い眼差しの中に孤独を感じた。少年は可哀相だと思ったが任務はこなすのが当たり前で見逃すなんて選択は考えていなかった。

その戦いは一瞬で終わった。フェイトの惨敗だった。少年の容赦ない攻撃にアルフは畏怖を覚えた。今まで局の魔導師は大したことなく、フェイトの敵じゃないと思っていたアルフだったが最強の最悪の敵を目の当たりにしていた。

「ロスト・ロギアは返して貰うよ」

無表情のままで少年はフェイトの手から離れたロスト・ロギアを手に取り、その場から消えた。ボロボロのフェイトを抱えアルフは母・プレシアの元へと戻っていった。

（イヤな事を思い出してしまった…　な…）

少年は今も脳裏に残るその思い出に縛られていた。謝るべきか悩んだ。

任務とはいえ女の子をボロボロにしてしまったのだから。だが、敵に情けをかけるのは弱い証拠だと師に教えられていたのだった。考えれば考えるほどに少年の表情は暗くなっていく。それに気づい

たフェイトは首を傾げながら少年に声をかけた。

「どうしたの…？気分が悪い…？？」

＞ｉ１２４０１―１６９５＜

はっと気づくと少年は苦笑し「大丈夫っ！元気だよっ！！」と明るく振舞ってみせた。その様子を驚きながら見ていたフェイトだが、「それなら…いいんだ…」と微笑んだ。

「不思議だよね…友達って。いるって思うだけで力が溢れてくる。強くなりたいって…守りたいって気持ちが大きくなっていくんだ…！」

フェイトは笑顔で言った。その顔にはかつての儚さは微塵もなく、今を楽しく生きている女の子の姿だった。少年はその表情に微笑みを返し、口を開いた。

「キミの表情初めて出会った時よりずっと生き生きしている。本当に良い友達に出会えたんだな。大事にして欲しいものだよ」

「うん、大事にする。わたしが守るよ。大切な友達を！」

少年の言葉に意気揚々と決意を固めるフェイト。その瞳には強い光が宿っていた。

「頑張ってくれ。それと嘱託魔導師おめでとう」

突然のカミングアウトに驚くフェイト。

「知っていたんだ…？」と照れながら聞き返す。

「一応局にセキを置いているんでね。やったな♪」

親指を立てウインクしながらにまっと笑う少年にフェイトは顔を真っ赤に染め上げた。

「う…うん…そうなんだ…？」

「そーなんですけど？」

じとーっと睨みつける少年の顔がフェイトに迫る。赤くなるイミがわからん…と呟きながら。フェイトは後ずさりし、苦笑しながら真っ赤な顔のまま、さらに冷や汗をかいた。

「そっそうだよね…　ごめん…」

何故か謝ってしまうフェイト。睨みつけられるようなことを言ってしまったことへの謝罪なのか…。

少年はフッと鼻で笑い、２本立てた指を顔の目じり辺りまで持っていき、満面の笑みを浮かべながら言った。

「まっこれからは味方同士だ。宜しく頼むよ」

「う…　うん…」

火照ったままのフェイトはとまどいの顔を見せながら返事をした。

「先に行く、じゃあな～っ！！」

ウインクをして左手で手を振りながら少年は駆け出して行った。
その光景をフェイトは手を振りながら見つめていた。

第2話へ続く。

第1話　「運命の再会」（後書き）

終始顔真っ赤のフェイトですみません！！

いじらしいフェイトが伝わればいいかなと思います…！！

最後まで少年の名前が出てきませんが説明のところを見ればわかって頂けるかと…！！

名前は次で出てきますので飽きずに読んで頂けたら嬉しいです。

スローペースな更新ですが…これからも宜しくお願いしますっ！！

追記：挿絵追加しました。百聞は一見にしかずですねw

第2話「金髪の少年」（前書き）

フェイトの前に突然現れた少年…。その少年とは…？

魔法少女リリカルなのはA' s、フェイトちゃんの苦労はまだまだ続きますって主人公フェイトちゃんだったのぉっ！？（ｂｙなのは）

とにかく、リリカルなのは、始まります―――

第2話「金髪の少年」

少年が走り去った後もフェイトは手を振っていた。そしてふと、思った。

（そういえばジノって何歳なのかな？私と変わらないくらいに見えるけど…）

見た目ならそうフェイトと同年代に見えるだろう。彼の事は局の人間であること以外何も知らないのである。

「今度会ったら聞いておこう…」

「何を？」

声がしたかと思うと、いきなり飛びついて来て「フェイトちゃんおはようっ」と元気な挨拶が聞こえた。

振り向けばそこには茶色の髪に紫紺の瞳、ツインテールにした髪型、自分と同じ制服を身にまとい背中にはリュックをせおっている。

「なのはっ！？」

フェイトはその声の主の名前を呼んだ。かけがえのない友達の名前を照れつつびっくりしながら。

「で、何を聞くの？」

さっきのフェイトの独り言に質問するなのは。

「え！？　えっと…　なのはにじゃなくて…　その…」

しどろもどろしながら答えるフェイト。なのははその答えにショックを受け、「分かってますよぉ…」と涙しながらヒドイ…とつぶやき、フェイトは自分の返した言葉に冷や汗をかき、ただただ後悔していた。

気分を取り直し、なのははウインクし人差し指を立て自信満々に言った。

「さっきの子にでしょ？黄色い髪の…男子服着てたから、男の子かな？」

なおも照れながらフェイトはつぶやいた。

「見てたんだ…」

「見えたのは遠くからだよ…」

ひらひらと手を揺らしながらなのはは答えた。顔見たかったなーとつぶやきながら。

なのはがフェイトを発見したのはかなり遠くからで少年の髪と男子制服を着用していることくらいしか視界では確認出来なかった。

「ちょっと前に知り合っていたんだ…。名前はジノっていうの」

「へー♪　カッコいい名前だね♪」

なのはが喜びながら答える。

「そうかな／／／とっても明るい子なんだけど凄く強いんだ…」

少年の事を優しい眼差しで語るフェイト。その表情はほんわかとしていて、なのははすぐにピンッと来た。フェイトはその少年のことが好きなことに。

ん？強い？？

「え！？強いって…？」

なのはは最後の言葉に食いついた。フェイトが強いという言葉を口にするのが珍しかったからだ。フェイトは目を閉じ、答える。

「魔法…かな。彼、管理局の人なんだよ。以前私にそう言ったんだ…」

「ええっ！？」

冷や汗をかきながら驚くなのは。少し前まで局に出入りしていたが一度も見たことはなかった。

「クロノなら　知っているかもしれないよね？執務官だし」

「うんっきっと知っているよ♪」

とまどいながら思案するフェイトに満面の笑みで答えるなのは。そして嫌な予感を感じ取るクロノ。エイミィはあっけらかんとしている。

「君は平和でいいな、羨ましい限りだよ」

とがっくり肩を落とすクロノにエイミィは「今平和でしょ♪」と笑顔で返していた。

「それより早く行こっ遅れちゃうよぉっ！」

ひーっと言いながらなのははフェイトを促す。

「うんっそうだね」

苦笑しながらフェイトも頷く。それを確認したなのはは校門へと駆け出した。フェイトは振り返りクロノ達のいる家に視線を送った。

――どうか彼のことを知っていますように…と。

キーンコーン…。

授業開始のチャイムが鳴りなのはたちは6時限まで受けた。フェイトにとっては何もかもが新鮮で胸がドキドキだった。

そして放課後――――

「なのは　また　明日ねー」

「フェイトちゃんもまた明日ね」

笑顔で手を振り別れの挨拶をするアリサとすずか。

「また明日ねーーーー♪」

元気良く手をぶんぶん振りながらなのはは2人に返した。フェイトも遠慮がちで手を振って2人に返す。

「さて…と♪早く帰ろッフェイトちゃんっ！」

ガッツポーズをしながらなのははフェイトに言った。

「うんっ」

微笑みながら力強く頷くフェイト。そして2人は通学路を走ってクロノの家へと向かったのだった。

…そこはフェイトの家でもあるのだが…。

「ただいまっ　クロノ君♪」

「ただいま戻りました…」

元気良く挨拶しているのはなのはで少し遠慮気味の挨拶はフェイトである。

「なのは、君は本当に元気だね。お帰り、2人とも無事に戻って良かったよ」

クロノがリビングから苦笑しながら出迎える。

「クロノ君に聞きたいことがあるのっ！」

なのは前のめりになってガッツポーズし、「詳しいいきさつはフェイトちゃんが教えてくれるはずだから　フェイトちゃんお願いっ！」とフェイトに説明を頼んだ。

「うっうんっ！」と頬を赤く染めながら承諾するフェイト。
そのやりとりを見てクロノは苦笑しながら「話は座って聞くとしようか。ここじゃなんだしな」とリビングに行くことを薦めた。

「そうだねっ　フェイトちゃん　行こっ！お邪魔しまぁす♪」と3人はリビングへと移動した。

第3話へ続く。

第2話「金髪の少年」（後書き）

前回からかなりの間が…すみませんっ！小説は表現が難しいですね、本当に＞＜

この話長すぎて切ってしまいました^^；倍ぐらいあったんですが…それもどうかと思いまして…。

次も頑張って書きますので宜しくお願いしますっ！！

第3話「時空の盾」（前書き）

前回より少し早めに更新できました。とはいえまだまだ文章力が無くてお恥ずかしい限りですが、読んで頂けると嬉しいです。

今回はかなり長めなので飽きられたらごめんなさい！

それでは第3話始まります――――

第3話「時空の盾」

リビングに移動した3人。朝の出来事をフェイトは説明した。

「え！？彼にもう会ったのか？」

内容をフェイトから聞いたクロノは驚く。その隣にいるエイミィも。

「うん…　朝にね。声かけられたんだ…」

ちょこんとソファーに座りながらフェイトは答える。隣にはなのはがさらにちょこんっと座っている。

「そうだったか。それは手間が省けて助かるよ」

クスッと得意気に笑うクロノの背後に男の子が現れた。その人物にフェイトは驚き、なのはは赤く頬を染めている。綺麗な顔立ちに女の子が赤くなるのは当然のことだった。

「な～にが手間が省けて助かるよっだぁ？ふざけやがって…っ！！」

青筋を立てクロノを思い切り睨みつける金髪の男の子。

「まぁまぁ…」

クロノは冷や汗をかきながら言葉を続けた。

＞i１５８３８―１６９５＜

「ジノ、これから仲良くやっていくんだから抑えてくれないか？頼むよ」

クロノが申し訳なさそうにしながら金髪の男の子に手を合わせ、頼み込む。

ジノと呼ばれた金髪の男の子はつーんとそっぽを向きながら「クロノとなれあうつもりはない」と言い放った。
「ひどっ」とつぶやきながらクロノは気持ちを落ち着け口を開いた。
「手厳しいな。だが君はこちらのお2人と行動を共にしてもらう」
お2人というのはなのはとフェイトのことである。指を差されたなのはとフェイトは何のことか分からず驚いていた。
「私一人では頼りないと言いたいのか？」
じとーっと目を据わらせながら睨むジノに冷や汗をかきながらクロノは「そうじゃないっ」と弁明する。
「個人で動くことが多い君はたまには団体で動いてみたいだろう？」
人差し指を立てながら笑顔で質問するクロノ。
「勝手なカイシャクありがとうっ」
青筋を何度も立て笑顔を引きつりながら「押し付けてるフウに感じるのは気のせいか？」とつぶやくジノ。
勝手な解釈でクロノに何度も仕事を押し付けられているジノだからこその見解であった。その呟きにはノーコメントで話を進めるクロノ。その2人の会話になのははただ驚愕していた。
「彼女たちと共にある事件を調べて欲しいと思ってな」
人差し指はそのままで更にウインクを放つクロノ。その後ろには笑顔でソファーに座っているエイミィの姿があった。
「初めからそう言えよ…」
クロノのウインクに気味悪がりながら呆れるジノ。さらに目を閉じながら言葉を繋げる。

「で、ある事件というのは？」
内容は聞いておこうと思ったジノは質問した。いつもとんでもない事件ばかり回されているからである。今回のもかなり苦戦していて人材が足らなく困っていた。だが、クロノはジノだから出来る事件を回しているつもりだが万能すぎてあれもこれもと回してしまい、結果睨まれる形となってしまうようだ。

「君の担当している件だよ。人手がいなくて困っていると思ってな。宜しく頼む」
「特別任務だぞ？キケン度５の。分かっているのかよ？」
にっこり笑顔で話すクロノに驚いて焦っているジノ。

「彼女達は戦闘経験も少ないから実戦で鍛えて貰おうかとね」
にへらと笑うクロノに「オニだな…」呟きながらジノは質問を投げかける。

「実戦積ませるのに特務させるのかよ…？」
「足手まといにはならないよ。２人ともＡＡＡランクだ」
確かにＡＡＡランクならばそうそう足手まといにはならない。寧ろ願ったりも無い人材ではあるが。クロノは憂いを帯びた表情でジノを直視し、そして言葉を繋げる。

「Ａランク１０人より使えると思うが駄目だろうか？」
「……」
その言葉にジノは絶句した。Ａランク１０人とを比べるクロノにただ、言葉を失うのみだった。だがすぐに気を取り直し心を落ち着け、クロノの言葉に答えを返した。

「ＡＡＡランクならだいぶ使えるが…」
クロノの例えに内心呆然とするジノであった。その２人のやりと

りにそわそわしながら見守っていたなのはとフェイトだったが、なのはは我慢しきれずに口を開いた。

「えっと…クロノ君…？私達はその子のお手伝いをすればいいの？」

質問する内容を頭でまとめながらなのはは続ける。

「キケン度５って…どのくらいなの？」

「なのは…君も一度彼の戦い方を見ておくといい。”時空の盾”＞タイム・リーヴ＜と呼ばれる者の戦いを…！！」

間髪入れず話すクロノ。なのはの問いには該当しない発言だった。

「＞タイム・リーヴ＜…やっぱりそうだったんだ…！」

それまで黙っていたフェイトがクロノの話を聞いて恐怖におののく。「？」と隣のなのははフェイトの様子に疑問を抱いていた。

「＞タイム・リーブ＜って何なの？聞いたことが無くて…！スゴい人なの？」

なのははクロノに質問を投げかけるがクロノは黙っているだけで何も答えない。

「時空管理局の切り札だよ、なのは。彼と戦って勝てたものはいないって聞いてる」

なのはの背後から＞タイム・リーヴ＜についての答が返って来た。それに聞き覚えのある声。声の主はフェイトの使い魔であるアルフだった。

「アルフさんただいま♪」

「アルフ、ただいま」

なのはとフェイトは振り返り、アルフに挨拶をした。フェイトは

微笑み、なのはは満面の笑みを浮かべながら手を振る。

「はーい♪2人ともおかえりだよ♪」

アルフもなのはと同じ動作をする。

「敵だととてもやっかいだけど味方だととても心強いんだからねぇ。悔しいけど実力は認めているさ」

ムスッとした表情でアルフは言う。認めたくはない、という顔つきで。

「それは有り難い。私自身も認めてくれると嬉しいんだけどさ？」

ウインクしながらジノはアルフに言った。

「それとこれとは別だよっ！！」

耳まで真っ赤にしてうろたえるアルフ。

「ざぁんねん♪」とジノは苦笑しながらもにっこりと笑顔を作っている。

その様子をなのはとフェイトはソファー越しから眺めていた。なのはは興味津々な顔で、フェイトはこの世の終わりの様な顔をして。

「今のどういう意味かなぁ？フェイトちゃんっ！！」

ドキドキワクワクが止まらないなのは。ジノとアルフの関係がすごく気になっていた。

「さぁ…？ぐすん」

涙目のフェイト。2人から視線を外し、フェイトは勝手な思い込みをする。これがきっかけでとんでもない方向へと向かうことになるなど、この時は誰も知る由もなかった。

――――――　それから数分が経った。

「とまぁ改めて自己紹介しますねぇ♪」

腰に手を置きながらジノが言った。

「うんっ」と笑顔で答えるなのはに「……」と沈黙しているフェイト。さっきのことがショックでまだ立ち直れないようだ。そんなことはお構い無しに自己紹介は始まる。

「私はジノ・ヴァインベルグ特務総官だ。宜しく頼むよ♪」

「高町なのはですっ宜しくなの♪」

「フェイト・テスタロッサです…」

ピース片手にウインクのポーズで決めるジノににっこり笑顔のなのは、しょんぼり顔のフェイト。

「フェイトちゃん、大丈夫なの？」

フェイトの元気がないことになのはは心配して声をかけた。が、なのはの声はショックで落ち込みまくっているフェイトには届かなかった。それどころかフェイトは弱気になるばかりだった。そして事態は最悪の展開へと向かってしまう。

「私…弱いから足手まといにしかならないと思う…」

「……。怖じ気づいたのかよ？」

フェイトの気弱な発言に眉をピクリとつり上げキッと見据えるジノ。さらにフェイトの気弱な発言は続く。

「私はジノにあっさり倒されちゃったんだよ？役に立てるわけ　ないじゃないっ！！？」

無敗を誇っていたフェイトだが、以前にジノに完膚なきまでに叩きのめされ、プライドはズタズタにされたのだった。フェイトの絶

対の自信をことごとく破壊してしまったのは、他ならぬジノであった。

（…気にしていることを…っ！私とて好きであのような事をしたわけでは…っ！！）

声に出して言いたかったジノだが、理由はどうあれ叩きのめした事実は覆されることはない。

「私に倒されているから役に立たないと思うのはヘンケンだろ？私は一度もキミを弱いなど言ったことはないと思うが？自分を過小評価しすぎやしないかい？」

ジノは矢継ぎ早に質問をする。にらめ付けているつもりはなかったが、分かって欲しいと思うあまり目つきが悪くなってしまっていた。

「……っ！」

フェイトは目を見開き、顔を真っ赤にしたあと、俯いて沈黙した。その様子を見たなのははジノの方面に向き、フェイトの前に立ち庇うようにして見据えて口を開く。

「フェイトちゃんをいじめないでっ！私の大事な友達なんだからっ！！」

「なのは…」

きりっと眉をつり上げ、ジノに注意するなのはにフェイトは心強く思い心の中で感謝の言葉を呟きながら大切な友達の名前を呟いた。

「イジメているつもりなどなかったのだが…そう捉えられてしまったのならば済まない…」

冷や汗を思い切りかきながら謝るジノ。言いたい事をずばっというジノの性格だけに苛めているように捉われやすいようだ。結果苛

めたことになってしまったジノはクロノに提案する。

「クロノ、やはり私一人でやらせてくれないか？」

ジノとて女の子を苛めたくはない。これ以上の失態は問題になると考えた上での決断であった。だが――――

「ジノ…君はコミュニケーションが必要だ」

クロノにびしっと指差され、気にしている部分を指摘されてしまった。それでもジノはなんとかしたい気持ちで一杯だった。さらに提案を持ちかける。

「次回に回してくれないか？ムリにさせることも無いと思うしさ…」

今の状況でパートナーを組むなど出来ないと思ったジノはクロノに頼むがクロノは聞く耳も持たず、そして一言言い放つ。

「逃げるのか？」

更にしれっと言い放つ。

「君が臆病者だったとはな…」

その言葉にカチーンときたジノは声を張り上げる。

「クロノッお前ッ！私は逃げてないし、オクビョウモノでもないッ！！ブシツケすぎるぞッ！！！」

「だったら出来るんだな？」

「う〝ッ…」

クロノの返答した質問にジノは黙り込んでしまう。

「出来るよ、大丈夫♪」

背後から楽観的な言葉が返って来た。ジノは驚き「ちょ…」と言い掛けるがなのははジノの肩に手を置いて笑顔で言葉を繋げた。

「頑張ります、ウフッ♪」
なのはの隣で大打撃を受けているフェイト。なのはの言葉に対してなのか、行動に対してなのかは分からないままだが。

「頑張ろうね♪」
なのははガッツポーズをしながら笑顔でジノに言う。苦笑しながらうなづくジノ。心配そうに見ているフェイト。

こうしてパーティは形成された。それぞれの思惑と共に――――

第４話へ続く。

第3話「時空の盾」（後書き）

ここまで読んで下さり有難う御座いました。次も頑張りますので感想などあれば宜しくお願い致します。

■挿絵追加しました。もう一枚入るかもしれません↑

第４話「闇のリング」（前書き）

久しぶりの更新です＾＾；　お待たせしすぎてすみません！　挿絵もあまり進んでないのですが（，；ω；、）

画力も欲しいですが、描くスピードもアップできたらいいのになと思う桐生であります（ノω、　。）　。・。＋

サンタさんお願いしま…↑

ようやく事件が発生です＾＾；　リリカルなのはＡ－ｓ　４話目始まります…。

第4話「闇のリング」

なのは達が自己紹介をし、フェイトとジノがもめあっている頃、とある道端で事件が起ころうとしていた。その道を歩いていた女子高生は髪は茶色、お尻まである髪をソバージュにし、着ている服はセーラー服、茶色のツヤツヤなローファを履いて歩いていた。　ふと女子高生が何かに気づいた。　少し先にはボロボロになった猫が横たわっていた。　そばに光るものがあったが猫の怪我に気をとられていてそこまで見えなかったようだ。

「猫？　大変！！　怪我してるじゃない！？」

女子高生は猫に近づき　すくい上げた。

「すぐに病院に連れて行ってあげるからね」

にこっと笑顔で言いながら病院へ向かう。　その時、近くに落ちていた光った物は女子高生の方へと飛び上がり、そして　左薬指にはまった。　はまったと同時にその物は光を無くし、指輪が出現していた。

それからパーティが形成されてフェイトとジノの揉め事も落ち着いた後、ジノは疲れ切った声でなのはとフェイトに依頼の内容を話す。

「君達にやって貰う事は、ある物を探して貰うことだ」

「ある物？」

「ロスト・ロギアね」

なのははきょとんとし、それに照れながらフェイトが応える。
「サスガだな、フェイト。覚えていてくれたのかい？」
照れ笑いで褒めながら　質問するジノ。　その顔は本当に嬉しそうである。

「自分で言ってたでしょ！」
かぁ～っと顔面を真っ赤に染めながら叫ぶフェイト。

「確かにそうだが…」

「あなたの方が忘れているんじゃない！？」
しょんぼりするジノとさらに叫ぶようにして質問するフェイト。
その２人の会話をなのはは「…」と沈黙しながら　再び騒動になる言葉を放ってしまう。

「２人って好き合っていたりするの？」

『んなっ！？』
フェイトとジノは赤面して一斉になのはを見る。

「べっ　別に好き合っているわけじゃないからねっ　なのは！！」

「そこまで言わなくてもいいんじゃ…？」
慌てふためいて否定するフェイトを制止の言葉をかけようとするなのは。元はといえばなのはがきっかけなのだが。

「好き…ねぇ？　私はフェイトのこと好きだが？」
さらりと述べるジノ。　軽いノリで言ってるようにも聞こえる。

「え！？　……ほんと？」
ジノの言葉を聞いて　フェイトは聞き返す。　なのははわっと笑顔になっていた。

「ウソ言ってどうするんだよ？　私はそんなことしないぞ」
ムッとしながらジノは反論した。

「でっ　でも…　アルフみたいな女性が好きなんでしょ？」
しり込みしながらフェイトは再び聞き返した。

「え〝っ！？」
後ろにいたアルフは的外れのことを言われ、全身鳥肌を立たせながら叫んだ。

「……は？　私が…　誰を？」
目を点にしながら自分を指すジノ。　イケメン台無しである。
ギャグなら面白いのだろうが。

「だからアルフを…」

「ゴカイだよッ　フェイトォッ！！」
フェイトの言葉を遮り、アルフが絶叫する。

「え？」　とフェイトは振り返り困惑しながら言葉を繋げる。

「ジノから認めて欲しいって…　自分のこと認めて欲しいって言ってなかった？」

「それはあたしじゃなくてさ…　フェイトのことだよッ」

アルフは照れながらフェイトに指を指して言った。

「え…？私……？？」

そういうなりフェイトはかぁ～っと顔をトマトのように赤く染め、顔から湯気が立ち、よろめき倒れそうになる。

「フェイトォッ！？」

「よっと」

壮絶な顔をするアルフ。　よろめいたフェイトを支えたのはジノだった。　その瞬間２人からは何故かバラが飛び散り、メルヘンのごとく画面は２人だけの世界に変わっていた。　がジノ自身は黙り込んで溜息を漏らしていた。

――

それから十数分が経った。

気絶したフェイトはジノがフェイトの部屋まで運んでアルフに頼んだ。　そして再びジノとなのははリビングに戻った。　いつの間にかクロノとエイミィがいなくなっていたが、ジノは構う事も無くソファに腰掛ける。

「私が話を聞くよ。フェイトちゃんには後で話すから」

「そうしてくれると助かるよ」

オロオロしながら言うなのはに疲労感たっぷりのジノ。　なのはなりの気遣いだった。

「とりあえず落ち着けたかねぇ？　で本題なんだが…」

「何々？　私にできそうなの？」

まだ本題にいってなかったりするのだが、これもフェイトの心の弱さが生み出した結果である。そしてこの後も苦労は続くのであった。

「動けるなら誰でもできる事だよ。あるネコを探して欲しい。いろんなコウゲキをかいくぐって逃げのびているそうだ。きっとボロボロだろう」

猫の大きさをジェスチャーで教えるジノ。動けるなら、の部分にはとある者への戒めの言葉にも捉えられる。　その者とは先ほど倒れたフェイトのことだったりするのだが。

「う〜〜〜〜ん…　猫かぁ…。　ひとえに言ってもいっぱいいすぎて探しづらいかも…！特徴があれば見つかりやすいかも、なんだけど…」

宙を仰ぎながらなのはは答える。ボロボロな猫などこの世界ではそうそうお目見えしないだろう。　縄張り争いで喧嘩に負けた猫ならお目見えするかもしれない。

「トクチョウ…か。　大きなものはホウコクされていないな…。フツーのネコだとは思うんだけどさ…」

『総官　大変です。　リングの反応が消えました』

「なっ…！？」

汗だくになって困りながら驚くジノの横に突然モニターが出現し、状況を報告した。　リングとはどうやら探しているものであるらしい。

『新たな宿主が見つかったかもしれません…』

モニター越しに話しかける女性の名はセリカ・グローレン。　ジ

ノの補佐官であり、主に情報を集める事が任務である。　彼女はその収穫率も高く、ジノも頼りにしている。

「…きっとそうだろうな。　いきなり消えるのはおかしすぎるだろう。ヤサしいおねーさんに拾われちゃったかもしれない！」

なんてベターな！！と叫びながらジノは右手に拳をつくり、力を込める。　後ろにはビクッとしたなのはが立っていた。

『これは…』

「何か分かったのかい？」

『その宿主ですが　女子高生のようです。　それもとびきりの美人ですよ？』

パソコンの画面を見ながら宿主の情報を読み上げる。

「そんなことは聞いてないから」

手を左右に小刻みに振り、汗だくで否定するジノ。　同じくなのはも汗だくになっている。

『高科　美奈子　１６歳　高校２年生ですね！　総官好みですよぉ♪』

鼻歌を歌いながらなおも茶化すセリカ。

「グローレン補佐官…　後で話がある…。いいよな？」

にこにこと黒い笑顔でジノは言い放つ。　モニター越しからえ〜〜〜〜っ！？という声と隣からうわ…　と呟いた声。　セリカの場合は自業自得である。

その場の雰囲気を何とかしようと、なのははロスト・ロギアにつ

いて質問した。

「そのロスト・ロギアのことなんだけど、どういうものなの？　気になっちゃって…」

具体的にはまだ聞いていなかったなのはは話を聞いてからずっと気にかけていたのだった。　するとジノは眉をつり上げ、いつになく真剣な面差しで話し始めた。

「【闇のリング】って呼ばれるユビワだよ。ショジしている者のタマシイを喰らうと言われているんだ。放っておくとキケンだからな…！なんとかカイシュウしなくては…」

ジノは腕を組み　う～むとうなり出した。　ジノでも簡単にはいかない事件のようである。　だからこそ頭を悩ませているわけだが。

「それは急がないとダメだよね！」

話を聞いてなのはも焦っている。悩んでいるジノを見ていてなのはにもその困り方が伝わって来ているようだ。

と、その時　――――――――――――――――。

＜マスター　ここより　３５００ｋｍ地点に魔力を感知しました＞

ジノのズボンが喋った…　と思いきや　デバイスの発生音からして、ズボンが喋った訳ではなくジノのデバイスが喋っていたのだった。

「！！」と驚くジノと「！？」とビックリするなのは。　驚きのあまり胸元に両手に拳を作りながら質問する。

「てっ…　敵なの？　３５００ｋｍってどの辺りだろ…？」

＜マスター　魔力感知失敗しました＞

なのはのデバイス・レイジングハートの感知範囲には入っていなかったようである。

「レイジングハートにはムリなんだね…。　気にしなくていいからね」

＜すみません…　かなりの広域を感知できるデバイスのようですね…＞

苦笑するなのはと落ちこむレイジングハート。　ジノは足を組み右手を腰に当て、左手をあごに置きながら自慢げに言い放った。

「一人で行動することが多いからさ、感度も最超広域なんだよな♪」

「それはすごい…」

なのははジノの言葉にも苦笑して答えるのだった。

第5話へ続く。

第４話「闇のリング」（後書き）

デバイスの英語がいまいち分からないので日本語で表させてもらいました＾＾；

英語力なくてすみません―｜｜'｜｜○

次回の更新は早く出来るように頑張ります（、∀、＊）ノ

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8987m/

魔法少女リリカルなのはA's　～光と闇の指輪～

2011年1月22日04時09分発行